第５章　結論および今後の課題

A. 結論

本章は前章のデータ分析とその解釈の結果に基づいて、本研究の問題に対して解答としての結論を出す。

全てが 126 エピソードがある 15 ドラマから、「ら抜き言葉」を使っている文は様々な動詞で 59 文がある。その「ら抜き言葉」に活用している動詞は 14 つがある。すなわち、「来る、見る、いる、食べる、出る、生きる、着る、寝る、起きる、降りる、受ける、逃げる、決める、満足させる」という動詞である。そのデータに対しての分析と解釈の結果に基づいて、次のように結論付けることができる。

1. 形態的な「ら抜き言葉」

形態的にデータを分析する結果に基づいて、一般的には、「ら抜き言葉」に活用できる動詞は 1～2 音節の語幹を持っている単純動詞であるということが分かった。1 音節の語幹を持っている動詞は「来る（18 つ）、見る（15 つ）、いる（6 つ）、出る（4 つ）、着る（2 つ）、寝る（１つ）」という動詞である。2 音節の語幹を持っている動詞は「食べる（5 つ）、生きる（2 つ）、起きる、降りる、受ける、逃げる、決める（各 1 つ）」という動詞である。

ところが、「ら抜き言葉」に活用できるのは 1～2 音節の語幹を持っている動詞だけでなく、それ以上にもある。それは単純動詞ではない「満足させる」という動詞の使役形である。

このように、形態的に「ら抜き言葉」に活用できる単純動詞は 1～2 音節の語幹を持っている単純動詞であるが、「ら抜き言葉」に活用できる動詞の使役形には語幹が 2 音節以上もあると結論付けることができる。

2. 意味的な「ら抜き言葉」

意味的にデータを分析する結果に基づいて、「ら抜き言葉」に活用できる動詞は他動詞と自動詞であるという動詞の種類によって、使い分けが行われていない。なぜかという、それは他動詞も自動詞も「ら抜き言葉」に活用できるから。それに、その「ら抜き言葉」に活用できる自動詞と他動詞は比率的にほぼ同数である。

次に、「ら抜き言葉」に活用できる動詞は可能の意味による使い分けがなく、能力可能と状況可能であるという可能表現の意味は両方も「ら抜き言葉」に現れているということが分かった。しかし、比率的には状況可能の意味を表す「ら抜き言葉」が能力可能の意味を表す「ら抜き言葉」より多く使用されたと結論付けた。

B. 今後の課題

以上に述べた研究結果の結論に基づいて、筆者は日本語学習者が「ら抜き言葉」に活用できる動詞について分かるようになると期待している。それで、学習者は「ら抜き言葉」を使用している日本人と話している場合に、その言葉は可能表現の「ら抜き言葉」であるということが分かるようになると期待している。このように、学習者はどのような動詞が「ら抜き言葉」に活用できるかどうかが区別できるようになり、コミュニケーションの中に誤用が起こらないと思われる。

本研究は結論を出した以外に、次の研究のために新しい問題であるという課題を現してきた。本研究は形態的にも意味的にも「ら抜き言葉」または「ら抜き形」に活用できる動詞を分析した。その分析の結果から、「ら抜き言葉」は使役形にも使用され、「使役可能形」になったと得られた。そのことから、全ての日本語の動詞は「使役可能形」に活用できるかどうかという問題を現している。したがって、その問題については今後の課題としたい。